

## 3月3日 四旬節第3主日

出 3:1～15    Iコリ 10:1～12    ルカ 13:1～9

### 1. ルカ

v.3,5 「言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

人はだれでも自分の人生が思うようにならなかつたり、思いがけない不運や災難に見舞われると、その原因をいろいろ探し出して不平を言うものです。四旬節が始まった灰の水曜日に、司祭は信者一人一人の額に灰をかけて「回心して福音を信じなさい」と唱えました。それは、あなたが回心しなければならないという呼びかけであり、カトリック教会では特にこの期節にゆるしの秘跡を受けることが勧められています。

ある人たちは回心ということ、心の持ち方を変えて善意の人になることだと理解しています。実際外部の人から見ると、カトリック信者は皆とても善い人たちのように見えるものです。ところが長く教会に來ていると次第にそれは表面上のことで、人間の心の中は必ずしも綺麗事だけではすまされない実態を知るようになります。人が神の裁きから逃れることが出来るか否かは、少しばかりの心がけの良さや善意で決まるものではありません。「(彼らは)・・・ほかのどの人よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。」あなたに必要なのは回心であって、少しばかりの心がけの良さや善意などではないと、聖書は語っているのです。

ミサで歌われる“栄光の賛歌”の最初の部分は、ルカ 2:14 からの引用なのですが、その翻訳が「地には善意の人に平和あれ」となっています。このような翻訳には、恐らくカトリック教会の古くからの用語法が反映しているものと思われますが、新共同訳聖書やフランシスコ会訳聖書は εὐδοκίας を“み心にかなう”と訳しています。聖書学としてはこの方が古くからの解釈であって、救いは人間の善意ではなくて、神の慈しみに依存していることを明確にしようとして来ました。

回心とは、この神の側からの和解の福音を信じて受け入れることであって(IIコリ 5:17-21)、単に心を入れ替えて、少しばかり見かけ上の善人や義人になることではないと、聖書は言っているのです。主イエスは罪人である私たちを執り成して、「多くの人々の身代金として命を献げるために来た」(マコ 10:45)ぶどう園の園丁なのです。

世界中で頻繁に発生する思いがけない不運や災難は、他人や企業や政府や国家等のどれかを、さらには神さえをも悪者扱いして非難するためではなくて、そこから“あなたには回心が必要だ”という警告を聞くためであると、今朝私たちは聖書を通して語りかけられているのです。

### 2. Iコリ

v.11 「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。」

私たちは皆、洗礼を受けてキリスト者になり、共にミサをささげる生活をして来ました(w.1-4)。「しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒れ野で滅ぼされてしまいました。」(v.5) なんと厳しい記述でしょう。「それでは、だれが救われるのだろうか。」(18:26) 「人間にはできないことも、神にはできる。」(18:27) このように理解して、「神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰」(使 20:21) を新たにすることが、私たちの回心でなければなりません。

### 3. 出

w.7-8 「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、……」

神は、御自分の民の叫びを聞かれる方ですが、旧約聖書は正しい祈りと間違った祈りの違いを非常に明確にしています。通常祈りは神の助けを求める嘆願を含みますが、この祈りには必ず神への感謝と賛美が伴っていて、その全体が罪の告白と悔い改めという土台の上に構成されています。「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を、神よ、あなたは侮られません。」(詩 51:19) 「御名のために、わたしたちを救い出し、わたしたちの罪をお赦してください。」(詩 79:9)

それに対して、神に不平を言い、自分たちが考え出した勝手勝手な要求を神に突きつけることは、間違った祈りであることを、民数記 16 章の物語りは示しています。「不平を言った者は、滅ぼす者に滅ぼされました。」(I コリ 10:10)

私たちのミサは、いわば共同体が共にささげる公の祈りであって、それは神に向かってささげる“神の民の行為”です。それは私的な同好会や親睦会などではなくて、“聖霊の交わりの中で、あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリスト”がその中心におられる聖なる集会です。私たちはそこでは「足から履き物を脱ぎ」(v.5)、“神がキリストによって世を御自分と和解させ”(II コリ 5:19)てくださった福音を聞いて、キリストの奉獻に一つに結ばれることを、喜びとしています。その全体の土台になっているのが悔い改め、すなわち回心です。四旬節はそのためにひととき大切な期節なのです。

アーメン。

## 3月10日 四旬節第4主日

ヨシュ 5:9~12    IIコリ 5:17~21    ルカ 15:1-3,11-32

### 1. ルカ

v.21 「息子は言った。“お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。”」

この物語りに登場する放蕩息子は、“悔い改めた一人の罪人”(15:7)として描かれていることに注目しましょう。彼は悔い改めて父の元に帰って来ました。彼はすでに息子としての資格を完全に失った者として帰って来ました。聖書が語っている“悔い改め”とは、“死んでいた”(v.32)、“失われていた”(15:4,8)者が、神に立ち帰ることです。

ただ後悔し、反省して、心を入れ替えるだけなら、それは世間で言う“更正”であって、罰金はこの更正を促すためのもの、禁固や懲役は犯罪人を更正させるための矯正教育の場であると、建前上考えられています。「豚は、体を洗って、また、泥の中を転げ回る」(IIペト 2:32)、“反省だけなら、猿でも出来る。” それらは、聖書が語る“悔い改め”とは似て非なるものです。

この放蕩息子は、その殊勝な反省によって自分の息子としての資格が回復出来ると期待したのではありません。彼は死んだ者、失われた者として、「死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神」(ロマ 4:17)に立ち帰ったのです。ですから彼は、「失われたものを捜して救う」(18:10)キリストに立ち帰る模範となった使徒と殉教者、聖人たちと同様に、ミサで朗読される福音の中に登場して来て私たちに真の悔い改めに導いてくれるのです。

カトリック教会には、“靈的善の交換”という教理があって、カテキズムでは“聖徒の交わり”の項で解説されています。誤解してはならないのは、聖人たちの功績はその模範と取り次ぎによって私たちに悔い改めに導くものであって、決してそれ自体が救いのお裾分けではないということです。自分は不信仰のままでも、そのような功績のお裾分けがあれば大丈夫だと考えていた人々に向かって、洗礼者ヨハネは「“我々の父はアブラハムだ” などという考えを起すな」(3:8)と警告しました。

### 2. IIコリ

v.19 「つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」

ここで和解の言葉すなわちキリストの福音をゆだねられた「わたしたち」とは、先ず第一に使徒たちのことを指しています。彼らはキリストの福音の使者であって、聖書を通して今も私たちに「神と和解させていただきなさい」と呼びかけているのです(v.20)。

“選ばれた人々、神の母おとめマリアをはじめ、使徒と殉教者、すべての聖人”(第三奉献文)との交わり

は、共にミサをささげる私たちをキリストに結び合わせるのです。“天上の教会とわれわれとの一致は、特に聖なる典礼において最も崇高な方法で実現される。”(教会憲章 50) そして神は洗礼を受けたすべての人々をも、福音の使者に成長させてくださいます。それが「わたしたち」の第二の意味です。

「神の憐れみがあなたがたを悔い改めに導くことも知らなくて、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。」(ロマ 2:4) 私たちは人に褒められるためではなくて、キリストに見つけ出していただくために、神に立ち帰りましょう。

### 3. ヨシュ

v.12 「彼らが土地の産物を食べ始めたその日以来、マナは絶え、イスラエルの人々に、もはやマナはなくなった。」

キリストが天に上げられた日以来、“救いの普遍的秘跡”である教会の時代が始まりました。「父の右に座っているキリストは絶えず世において働き続け、人々を教会へ導き、その教会を通して人々をより密接に自分に結びつけ、そのからだと血をもって人々を養い、自分の栄光の生命にあずからせるよう働いている。」(教会憲章 48) そしてこの教会は、天の栄光において初めて完成を見るのです。その日には、悔い改めて神に立ち帰る私たち罪人の目から、神御自身が「涙をことごとくぬぐい取ってくださる」(黙 21:4)ことでしょう。

私たちは今年も四旬節の歩みを通して、御子キリストの救いをもたらす受難、復活、昇天の神秘の祭儀に、真の悔い改めをもって備えようとしているのです。                      アーメン。

## 3月17日 四旬節第5主日

イザ 43:16～21 フィリ 3:8～14 ヨハ 8:1～11

### 1. ヨハ

v.11 「イエスは言われた。“わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。”」

ヨハネ文書(福音書と手紙)には、罪に関して一見矛盾するような二つの表現があって、今朝の朗読箇所にはその双方が登場しています。「これからは、もう罪を犯してはならない」(v.11)は5:14でも語られている言葉で、これはヨハの「御子の内にいつもいる人は皆、罪を犯しません」(3:6)、「神から生まれた人は皆、罪を犯しません。……この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません」(3:9)と同じ理解の上に立って言われているものです。それに対して、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」とイエスが言われると、誰もいなくなってしまったというのは、ヨハの「自分に罪がないというなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にはありません」(1:8)、「この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです」(2:2)、「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(4:10)という、もう一つの“罪の事実”を前提にして語られています(ロマ 11:32 参照)。

ヨハネがこのような二つの事実を何の矛盾も感じないで並列して語るとき、そこで当然の前提としているのは次のような原始教会の使徒的福音理解でありました。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ロマ 3:23-24) つまり、それは人が自らの善い行いによって正しく、もはや罪を犯さない人間に更正することではなくて、ただキリスト・イエスによる贖いに与ることによって、いわば“キリストを身にまとう(着る)”のです(ロマ 13:14)。

「教会がキリストの死と復活の記念(ミサ)を行うとき、救いの力がわたしたちのうちに働きます」(ペロナ秘跡書)と言われている教義を、カトリック教会は大切にきて来ました。ミサが本質的にいけにえであること、ミサを通して私たち信者はキリストの奉獻に一つに結ばれること、このことをよく理解しましょう。“ミサに結ばれ、ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられる生活”(ミサ典礼書の総則 1)へと、私たちはキリストの「行きなさい」(v.11)という言葉で今朝も送り出されるのです。

### 2. フィリ

v.9 「わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。」

この「神から与えられる義」こそは、私たちキリスト者の命です。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。」(マコ8:36-37) 四旬節に特に勧められている“ゆるしの秘跡”で、司祭の口から語られる「神が教会の奉仕の務めを通して、あなたにゆるしと平和を与えてくださいますように」という言葉を聞くとき、信者の心に神への限りない感謝が溢れますように。

### 3. イザ

v.21 「わたしはこの民をわたしのために造った。彼らはわたしの栄誉を語らねばならない。」

“キリストの民である”ということから切り離して、一人の教養人として聖書を読む人は、たとえそこから多くの有益な教えを学んでも、“キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義”を得ることは出来ません。

神は、異邦人がユダヤ人と共に約束されたものを一緒に受け継ぐために(エフェ3:6)、教会をキリストの血によって贖い取ってくださいました(使20:28)。「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ1:16)なので、私たち信者は“キリストの体である教会”(エフェ1:23)に属する者として、聖書を学びます。古くから洗礼志願式の中で行われて来た「信条の授与」(カテキズム186)と、洗礼と堅信において行われる「主の祈りの伝授」(カテキズム2769)が、私たち信者が聖伝と聖書から神のことばを聞くことが出来るための基本的な前提条件であることを、よく理解しましょう。

私たちは、“御子キリストの救いをもたらす受難、復活、昇天を記念し、その再臨を待ち望み”(第三奉献文)つつ、“ことばの典礼”と“感謝の典礼”によって神のことばを聞き、共にミサをささげましょう。

アーメン。

## 3月24日 受難の主日

イザ 50:4~7 フィリ 2:6~11 ルカ 23:1~49

### 1.

「主は、……ポンティオ・ピラトのもとで、わたしたちのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、……」(ニケア・コンスタンチノーブル信条)

ユダヤ人たちがとんでもない間違いを犯して、人類の歴史に大いなる汚点を残したと考えるなら、私たちは受難物語りを正しく理解していないこととなります。マルコ福音書は「これは聖書の言葉が実現するためである」(14:49)と、またマタイ福音書は「わたしが…… お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう」(26:53-54)というイエスの言葉を書きとめています。「このイエスを神は、お定めになった計画により」(使 2:23)、「わたしたちの罪を償ういけにえとして」(ヨハ 4:10)「お与えになった」(ヨハ 3:16)という聖なる事実に、私たちは今朝再び直面させられているのです。

### 2. ルカ

v.28 「イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。“エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。”」

言うまでもなく、イエスはここで来たるべき終末の裁き(ロマ 14:10、II コリ 5:10)を、私たちが直視するようにと求めておられます。“十字架につけろ、十字架につけろ”という“その声はますます強くなり”、ついにその声が勝ったのです。それは神の子イエスが私たちに代わって負われた“裁きの声”でありました。

イエスの愛によってもはや裁きは無くなってしまったとか、私たちはもはや裁きの座の前に立つ必要が無くなったと、勘違いしてはなりません。そうではなくてイエスは、“生きている者と死んだ者を裁くために来られる審判者”(II テモ 4:1、使 10:42)となるために、“わたしたちのために呪いとなって木にかけられた”(ガラ 3:13)のです。だれも終わりの日に、神の裁きの座の前に立つことから逃れることは出来ません。しかしこの終末の裁き主が、“十字架にかかって、(既に)自らその身にわたしたちの罪を担ってくださったイエス”(I ペト 2:24)であるというのが福音の告知であり、教会の信仰なのです。

### 3. フィリ

v.8 「へりくだって、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで……」

御子のへりくだりは、身代わりに負われた私たちに対する神の裁き(II コリ 5:21)の、いわば徹底的な承認でありました。

vv.9-10 「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、……」

使徒パウロは、ロマ 14:11 で イザ 45:23 を引き合いに出して、「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」と教えています。そうです。私たちがやがてひざまずくその裁きの座に立つ審判者が、他ならぬ十字架のイエス御自身であることを感謝しましょう。

#### 4. イザ

v.6 「打とうとする者には背中をまかせ、ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。」

十字架のイエスは、私たちの同情の対象ではありません。それは“神が信じる者のために罪を償う供え物とされた”(ロマ 3:25)方、“十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださったキリスト”(1ペト 2:24)です。

「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(エフェ 1:7)

アーメン。



## 3月31日 復活の主日

使 10:34~43    コロ 3:1~4    ヨハ 20:1~9

### 1. ヨハ

v.8 「見て、信じた。」

私たちが御子イエス・キリストの復活に心を向けるとき、それは私たち自身がキリストの復活に結ばれて、今や新しい命に生きているという事実から切り離して考えることは出来ません。それは信仰の事柄であって、人間の論理で説明し理解出来ることではないからです。

「二人はまだ理解していなかった」(v.9)という言葉は、現代の私たちへの警告のために語られているのであって、それは“生きておられる方を死者の中に捜す”(ルカ 24:5)ということの無意味さを、強烈に告げています。最初の使徒たちが“見て、信じた”ように、私たちは使徒と預言者による福音の証言を聞いて、今信じているのです。救いは、「始めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:17)

イエスが死んで、墓が空であったということから説明出来ることは、“墓荒らし”(v.2)以外にはあり得ません。私たちの人生が例外なく死をもって終わるということから、だれも決して逃れることは出来ません。それが人間にとって理解可能な唯一の結論です。

しかし、信仰の言葉(ロマ 10:8)は高らかに宣言します。「わたしたちの過越キリストは、世の罪を取り除かれたまことのいけにえの小羊、ご自分の死をもってわたしたちの死を打ち砕き、復活をもってわたしたちにいのちをお与えになりました。」(復活節の叙唱) キリストは復活して、罪と死と悪魔に勝利されました(ヘブ 2:14-15、ヨハ 3:8、1コリ 15:54-56)。ですから、「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。」(1コリ 15:57) これが、復活節の主題です。

### 2. コロ

v.1 「あなたがたは、キリストとともに復活させられた ……」

その意味は、2:12 に明確にされてます。すなわち、「(あなたがたは)洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。」

この“復活の命”は、今はまだ「キリストと共に神のうちに隠されている」(v.3)けれども、終わりの日には「キリストと共に栄光に包まれて現れる」(v.4)命であって、私たちの救いはこの“復活の命”“永遠の命”から切り離しては決して語れないことを、明確にしておかなければなりません。

私たちキリスト者がキリストの死と復活に結ばれて(ロマ 6:3-11)、からだの復活の希望(ロマ 8:23-25)に生き、御国を受け継ぐ保証(エフェ 1:14)を与られているということと、しかも今は「この地上の幕屋にあって苦しみもだえている」(II コリ 5:1-5)という現実が、同時に共存している中で、歴史の教会はこれまで歩んで来たと、これからも歩んで行きます。もしこの緊張関係を知らない教会があるなら、それは“この世

のことしか考えていない”(フィリ3:19)、ただの幻想に“望みをかけているだけの惨めな集団”(Iコリ15:19)にしか過ぎません。神がそのような“悪魔の策略”(エフェ6:11)から、私たちの教会を守ってくださいますように。

### 3. 使

vv.42-43 「そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証しています。」

これが教会の宣教の主題であることを、現代の教会は再び明確にしなければなりません。司祭の説教にせよ、信者の宣教奉仕にせよ、これまでどの程度本気で、「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」(ロマ14:10)と語られて来たかどうかと考えてみましょう。実に、「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです」(ロマ8:34)という“よい知らせ”が、本当に宣べ伝えられ、本当に力強く証しされて来たかどうかを、私たちは反省すべきなのです。

復活された主にお会いして、やがて一同が皆“見て、信じるようになった”(ヨハ20:8,20,29)、そのような「神に選ばれた証人」(v.41)である使徒たちの証言を聞くことによって、代々の時代のキリスト者も復活されたキリストを信じて罪の赦しを受けました(エフェ1:7、Iペト1:8-9)。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(聖書朗読と説教)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ10:17) この宣教の主題が、“この世のこと”や“ただの幻想に過ぎない話”によって覆いを掛けられてしまわないために(IIコリ4:3)、「上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないように」(コロ3:2)しようではありませんか。

「実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」(Iコリ15:20)

ハレルヤ、アーメン。